

平成29年9月24日(日)

老球の細道358号

### ああ！私の健さん

今は昔、家族に高倉健(故人)と緒形拳(故人)どっちがいいと聞くと、必ず緒形拳のほうがいいと答える。同じ日本映画界を代表するケンさんでも高倉健はさっぱりしゃべらないから好きではないという。その無口でストイックのところが健さんの魅力なのに家族にはわからない。いつも考え方の分かれるところであり、常に私が浮き上がる。

その高倉健が平成25年に文化勲章を受賞した。『網走番外地』や『昭和残侠传』などの任侠映画でのストイックな演技で独自の路線を築き上げ、その後『幸福の黄色いハンカチ』『南極物語』『居酒屋兆治』『駅』『八甲田山』などで映画ファンの支持を広げ、日本を代表する俳優となった。

私が映画を趣味とするようになったのは、小学生の時、父と一緒に映画館で時代劇を見たのがきっかけである。はまってしまったのは高校時代に観た高倉健の昭和残侠传シリーズだ。土曜か日曜日の午後、バスケットボールの練習が終わるとよく映画館に足を運んだ。部の同級生に映画館の御曹司がいて、彼と一緒に映画館に行くと、当時の若松の映画館はほとんど顔パスで入場できたからである。

その時に大好きだったのが昭和残侠传シリーズ。高倉健扮する「花田秀次郎」という寡黙なヤクザ者が理不尽な仕打ちに我慢に我慢を重ねる。我慢が限界を越えると爆発し(今でいう切れる)、他人のため世のために悪を退治する。そのクライマックスシーンになると、映画館内のお客さんから思わず「健さん！」のかけ声がかかる。今では考えられないような風景であった。映画館を出て家に帰るまでの道のりは刀(ドス)は持っていないが、すっかり「花田秀次郎」になりきって帰ったものである。夜遅く帰ると、家に着くなり母の叱責で「室井富仁」に戻る。健さん演じる主人公は青春時代のヒーローだった。

『プロフェッショナル仕事の流儀・運命を変えた33の言葉』(NHK出版新書)には今は亡き高倉健の言葉が掲載されている。それは「生き方が仕事に出る」ということ。その中で健さんは次のように語っている。

「俳優にとって大切なのは、造形と人生経験と本人の生き方。生き方が出るんでしょうね。テクニックではないですよ。肉体は訓練すると、ある程度までいきますよ。僕でも調教されると筋肉がつくしね。毎日良いトレーナーについて柔軟体操をやっていれば、体もしっかり柔らかくなる。本を読んで勉強すれば、ある程度の知恵もつくよね。生き方ってというのは、そうはいかない。芝居に一番出るのが、その人のふだんの生き方じゃないか」

そして、その生き方で最も大切にしているのは感受性だと言う。健さんはさらに語る。「自分の感性、感じられる心を大切にする。それしかない。そのために良い映画を見たり、自分が感じられる映画や、感じられる監督とか俳優さんを見つけて、その人たちのものを追っかける。それから自国のものばかり見ないで、外国のものを意識的に見る。それから、自分が感動できる小説を読む。あとは色々な美術品を見る」

日本を代表する映画監督・山田洋次は、「彼は何を演じても高倉健。ある典型的な人間像を作り、自分自身の人生も重ねた」と健さんを絶賛する。世界のバスケットボールの名コーチ達も必ず自分のカラーや哲学をそのチームに植えつける。チームを見るとヘッドコーチは誰だということがすぐにわかる。コーチの生き方もそのチームに出る。